特集：「光学」の編集をふりかえって

1972年光学懇話会の機関誌「光学」が創刊されてから15年が経過し15巻6号まで合計90冊の「光学」が発刊されました．すでにお知らせしておりますように，明年1月から，本誌は年12回毎月発刊へと大きく発展いたします．この15年，光学に関する研究，開発の進歩はめざましく，またエレクトロニクスとの結びつきがより強くなってきました．本誌は，このような研究推進に大きな役割を果たしてまいりました．会員も大幅に増加し，光学プロパーの研究者だけでなく電子工学，情報工学専攻者の会員増加がとくに目立っております．そこで，「光学」編集の15年を振り返って明年からの新たな発展を願って歴代編集委員長から編集の思い出，今後の希望などを執筆していただきました．初代大頭先生から現山口委員長まで8人の方方がその重責を担われましたが，今回は昨年他界された高崎先生（第4代委員長）と現山口委員長を除いた6名の先生方から原稿をいただきました．諸先生の貴重な体験談を今後の光学の編集と発展に役立たせたいと考えております．（編集委員会）

第三世代への脱皮を

初代編集委員長
大頭　仁（早大理工）

すでに15年以前のことでもあり，断片的なことしか思い浮かばない．不思議な話であるが，過去の記憶は，忘却という都合の良いフィルタを通して，大体において楽しかったことしか残らないのがつねである．

当時，20年ほどの歴史と伝統をもった光学懇話会の体質を保ちながら，学術雑誌として厳しい査読制度を確立し，原著研究論文誌としての体裁をいかに整えるかを第一課題とした．また，光に関する学術と技術の将来を見通して，古いものと新しいものの正しい把握をすることが編集委員会に与えられた使命であるように思った．

「光学懇話会ニュース」，「光学ニュース」の初期の時代には，先進国に追いつけ，追い越せの目標があり，筆者のみならず，当時の若手にとって外国事情などを知る唯一の専門機関誌として「光学ニュース」が機能していたように思う．国際会議出席はいうに及ばず，外国文献の入手にも不便を感じていた頃であり，このニュースで知らされる海外事情に胸さわぎを覚えた想いがある．光学懇話会の名称どおり，会もニュースもサロン的なものではあった．しかし，応用物理学会の寛大な理解のもとに，「応用物理」誌のうち，年間2冊は「光学特集号」として，光学懇話会の編集による論文発表の場となっていたことは光学研究推進のために大きな貢献であった．

昭和40年代には，光学工業も飛躍的に発展し，また電子工業やさらにレーザーの開発など革新的技術の時代となり，応用物理学会としても「光学特集号」を発行することは不自然のものとなった．もちろん，光学の分野では多くの優れた研究者，技術者が輩出し，国際的にも国際光学委員会（ICO）の有力メンバーとなって，原著論文発表の場はぜひとも必要であった．そこで，光学懇話会としては，とくにA会員の立場（応物学会講演会での登壇権がなく，また特集号が解消されるとその配布の特典も投稿権も失う）を考え，独立した学会設立の案も慎重に検討されたが，時期尚早であるとの結論に達し，今日のような姿をとることになった．応用物理学会としても，他の分科会とは異なって，独立した学術雑誌「光学」発刊を容認したことは大英断であったと考えられる．

このような意味で，昭和27年に設立された光学懇話会の歴史のなかで，「光学ニュース」の20年間を第一世代と考え，昭和47年「光学」発行の期から第二世代に入ったともいえよう．

さて，このような経緯は自然というか，むしろ必然の成りゆきとも思われるが，筆者個人としては，思いもよらず最初の編集委員長に指名され非常に悩んでしまった．新しく幹事長になられた田幸敏治先生から，突然の電話で依頼を受けたときの驚きと困惑の感がいまではなつかしく想い出される．

編集委員と文献抄録委員各位の熱意に溢れた協力によって，無我夢中ではあったが2年間欠号もなく編集できたことは幸いであった．準備段階（昭和45年および46年度の幹事会，編集委員会および「光学」発刊準備委員

会による）での緻密な計画が整っていたために，1号，2号と初期の頃はむしろ順調に進んだ記憶がある．その後，雑誌の性格づけに関係の深い解説や展望記事の選択をはじめ，原著論文投稿の促進，さらには国内誌として自己満足におちいらぬよう英文論文化の問題など，毎回のように編集委員会で討論されたことを想い出す．とにかく，最初の編集委員会としての基本構想は，

（1）　従来の「光学ニュース」のもつ情報交換の役割と，「光学特集号」のもつ学術誌としての使命とを，一冊の「光学」誌に盛り込む．

（2）　ややもすると「光学懇話会・イコール・レンズ屋集団」というイメージから脱却して，広く光を取り扱う分野に目を向けながら，次の世代につなげる．

ということであった．そして，とりあえずは和文のみの原著論文誌として育てていくことにした．

苦労がなかったといえば嘘になるし，会員の皆様に少なからずご迷惑をおかけしたことも事実である．しかし，今日振り返ってみると，ただ格調の高い，内容の豊富な新しい「光学」誌を作りたいという気持にまとまって，編集委員全員で仕事のできたことは楽しい想い出である．あまり知られていないかと思うが，表紙デザインは準備委員会の段階で公募し，オリンパス光学工業(株)の方からいただいたものであり，また今日も使われている巻頭言のカット（椅子の向きがいつの頃からか逆になっているが）などは，編集委員の一人であった溝淵靖夫氏（東芝）の名作品である．

その後，多くの有能な編集委員会を経て今日のように立派な「光学」に育ったことはまことに嬉ばしい限りである．また，62年度からは月刊誌になるとのことであるが，その努力と見識には感服している．月刊誌ともなると，間もなく親学会の機関誌である「応用物理」と肩を並べるような立派なものになるにちがいない．

一方において，「光学懇話会」という名称は，光学に関連する分野での新しい若手研究者にとっては何か異質なものに感じられていることも事実である．現文献抄録委員長，有本昭氏の統計（「光学」第15巻，2号，p. 113）によると，日本の光学関係の研究の多くは，JOSA や Appl. Opt. ほか英文誌に投稿されている．よく知られているとおり，近年の光学の役割は電気，機械，材料その他多くの工業技術のなかで，ますますその重要性が増大している．

筆者個人としては，応用物理学会がその分科会をそれぞれ独立的なものに育て，その連合体として機能するような，いわゆるソサエティ制度を導入することが望ましいと考えているが，現状では困難な点が多い．かといって，日本で唯一の「光学」専門誌が，一分科会である光学懇話会の独占であっては，今後の健全な光学の発展に支障をもたらすのではないかとも思う．光学懇話会としては，一昨年以来，広く会員を募集し，「光学」編集も狭い固い殻の内にこもらないように努力してきた．しかし，その組織上，何か限度を感ずるものがある．日本の今後の光学に関連する学術・技術および工業が，さらに強力にかつ健全に発展し，真に国際協力をするためにも，新鮮な血を積極的に導入すべき時期に来ているのではなかろうか．

この第二世代を人生の青年期にたとえるとすると，「永すぎた春」にならないように，良き伴侶と一体となって，ますます社会に貢献できる道を求めることが必要かと思う．

(1986年10月7日受理)

「光学」編集について

第2代編集委員長
桑原　五郎（兵庫教育大）

私が編集に関与したのは非常に昔のことで記憶もさだかではないが，折角のご依頼なので思いついたことを二，三書くことにする．

「光学」を郵制上の学術雑誌と認めてもらうため，当時郵政事務次官をしていた旧制高校時代の友人に頼んだ記憶がある．効果があったかどうかわからないが，とにかく認可された．編集委員会では，普段接触の少ない会社関係の人の話を聞く機会があり面白かったと思う．

光学もエレクトロニクスと結合し，広く利用されるようになったが，ちゃんとした内容の光学を重視している「光学」の編集方針には賛成である．学会誌には，投稿されたものはオリジナルで内容に誤りがなければ掲載することを建前とする研究結果の発表誌と，会員の多くが興味をもちそうな記事を主体として編集されるものとがある．前者には，基礎的分野，応用分野いずれも国際的で，サーキュレーションの多い雑誌がいくつもあり，オリジナルな良い論文はそちらに流れるであろう．

光学は，従来のように独創性のある「講義」（連載でなくてよい），日本あるいは外国誌に出した一連の研究をまとめた著者自身の手になる「レビュー」を主体にするのがよいと思う．月刊にするほどこうした方面の良い原稿が集まるか少々疑問である．欲をいえば，すでに半ば確立した内容の記事のほかに，Physics Today の discoveries 欄のような hot news の簡単な記事も望ま

しいと思う．

広く一般投稿をうけつけることは結構であるが，投稿されたものは間違いでない限り載せるということでは紙数はいくらあっても足りず，二重投稿の問題も起こるであろう．あくまで，「光学」は多くの会員の興味を主体とする編集方針を続けていただきたいと思う．情報氾濫の時代で，関連する内容の学会誌が，内，外たくさんあり，会費も馬鹿にならないから，月刊にすることは慎重にお考えいただきたい．　(1986年7月29日受理)

「光学」編集をふりかえって

第3代編集委員長
片山　庸郎（防衛大学校）

私が「光学」編集委員長の大任を仰せつかったのは，ちょうど10年前，1976年，1977年（5巻，6巻）の2年間である．幹事長は田中俊一先生である．

当時，光学懇話会はひどい財政難の状態にあった．石油ショックに続く不景気のゆえと思われるが，出版物の減収，前年度来の赤字繰越し，さらに出版費の増大，郵送料の値上げ等により，懇話会の運営は正に火の車であった．懇話会の支出の大部分を占めているのが「光学」出版費であるから，その予算も当然抑えられることになる．従来のとおりでいくとすれば，ほぼ1号分の赤字になってしまう．定期刊行物を欠号にさせないとすれば，頁数削減は必然であり，従来1号あたり50〜60頁であったものを40頁以内に抑さえることが編集の至上命令であった．そのため，“会よりのお知らせ”等削りようがない記事を除き，論文を含めすべての記事を短くする方針をとり，著者の方々に掲載決定の通知とともに原稿短縮依頼をするという真に失礼なことになった．著者の方々も了承され，原稿短縮に協力していただき，その結果，毎号ほぼ40頁に減量することができた．当時の著者の方々に改めてお詫びし，感謝申し上げる．また例年の記事である“光学界の展望”は分野を整理統合し，かつ関連分野は同一人に執筆をお願いして内容の重復をさけるようにし，ささやかながら頁数削減に努力した．

編集の方法は桑原前委員長のやり方をそのまま踏襲しなんら新機軸はない．各号2名の編集委員の責任編集制をとることにしたが，これは事実上機能せず各号とも委員全員による合議制で2年間続けた．この2名責任編集制は，後の高崎委員長により確立されたようである．

話は前後するが，委員長としての初仕事は編集委員の人選である．これが案外大変なことであったが幸いにして非常に優秀な方々に恵まれ，正直なところ私自身は何もしなかったともいえる有様であった．委員の方々のご努力に心から感謝申し上げる．とくに編集局の原芳郎氏には何から何まで全面的にお世話になった．当時，同氏は表面に出ておらず，縁の下の力持ち的存在であり申し訳なく思っている（同氏の名前は高崎委員長時代に編集局長として7巻から編集委員表に載ることになった）．

新企画としては，1976年から第6号を“光学シンポジウム”特集号とすることにした．同シンポジウムについては“光学シンポジウム”の発足と講演募集（光学：**5**, No. 1 (1976) 39)，および小瀬先生の回顧談（光学：**11**, No. 1 (1982) 17）に述べられているが，「学術講演会等で発表されることが少ない“現場的な技術”の諸問題を発表し討議して，産業界における“ある種の閉鎖主義”を打破し，国際的な技術レベルの維持，高揚をはかる」こと，早くいえばA会員を主とした講演会を開催すること，を目的として同年から催されることになったものである．その趣旨から，同シンポジウムにおける発表内容はいわゆる研究論文ではないとしても，現場の技術者にとっても学界側の人間にとっても興味をひくものであり，有益であると思われる．したがって，同シンポジウムに参加できなかった会員の方々にもその内容をお知らせすることは意義があると考えたからである．この第6号を“光学シンポジウム”特集号とするスタイルは1981年（10巻）第6回シンポジウムまで続き，少し形式を変えて1983年（12巻）第8回シンポジウムまで続いた．

当時検討されたが見送られたこととしては外国語論文の掲載，懇話会25周年記念号の発行等がある．前者はまだ実現していないようであるが，後者については1982年（11巻）に立派な30周年記念特集号が発行されたことはご承知のとおりである．また編集とは直接関係ないが，1977年，光学会独立案がふたたび問題になり，小瀬先生を委員長として検討されたが，“親学会からの圧力がない現在，あえて独立するメリットはない”として見送られるといったこともあった．

思いつくままに一昔前の編集状況を書いてきたが，いま，改めて書棚に並んでいる「光学」を眺め，当時の厚さ（薄さ）にくらべて現在は100頁に近い厚さに成長し，さらに来年度からは月刊誌へと倍増の躍進を逐げるという現状をみるとき，ここ10年間における日本の光産学界の発展（たんに本の厚さだけの問題ではないが，発展状況を示す簡単な目安とはなろう）に感無量である．同時に「光学」をここまで発展させてこられた歴代編集委員の諸氏に敬意を表する．

(1986年8月6日受理)

「光学」編集：苦闘と気炎の思い出

第5代編集委員長
田中　敬一（北大工）

私が「光学」の編集委員長をつとめさせていただいたのは昭和55年1月から56年12月までの2年間であった．委員長のつとめを終えてから間もなく元勤務先の工業技術院計量研究所から北海道大学に移ることになり，新しい職場での体勢をととのえたり第13回国際光学委員会総会（ICO-13, Sapporo, '84）を迎えたり多忙な日々で過去の記憶が薄れ，編集活動時代のことをふり返るのにいささか苦労しつつ，思い出すことなどを書いてみる．

編集委員長ともなれば光学全般の広い視野と将来の展望をもっていることが必須条件であるにもかかわらず，長年光波長標準という限られた範囲で仕事をしてきた浅学の私が敢えてこの重責をお引き受けしたのは，ある年齢に達したならば長い間お世話になった学会に何らかの形でお返しをしなくてはと自分に納得をさせたからであった．たまたま前任者の故高崎宏氏とは大学時代より親しく，専門の研究分野でも共通のものがあり，たびたび往来があって，同氏の「光学」編集に対する真面目で誠実な取組み方をみていたので，大いに見習わなければ，と思った次第である．一緒に苦労してくださった委員会のメンバーの方々は大学，企業および研究所から選出された16名と編集局長の原芳郎氏であったが，とくに日本電気の西田信夫氏には2年間事実上の副委員長としてご尽力願った．年度の変り目でほぼ半数が交替したから2年間で延25名になったと思う．当時から責任編集制度をとり，委員2名ずつが協力して担当号の編集企画を行ない，これを東京，本郷の学士会分館での隔月の編集委員会で検討しては具体化したわけである．委員諸氏がそれぞれ昼間の勤務を終えてから参集し，編集に取り組む熱意と個性の持主ばかりであるから，時には企画の是非について見解の相違も生じ，議論に予定以上の時間を過ごしたことなどを思い出すが，それ以上に印象に残っているのは委員会終了後，まことにたびたび誰かが誘導して地下鉄本郷三丁目駅の傍の居酒屋に流れ込み，ジョッキのお代りも進むほどに「光学」の発展の夢から光学懇話会独立論の熱気が盛り上り，やる気満々の若手諸氏が“われわれがやらなければ光学の発展はない．委員長ももう一期留任して一緒にやるべきである”とはっぱをかけられたのを改めてなつかしく思い出す．この雰囲気は頼もしくもあり，さりとて無責任な安請合いもできず，実情を伝えながら先輩諸氏のご意見などをうかがったものだった．

また編集委員会が直面した，忘れることのできない苦労話は，光学懇話会の創設以来，「光学」の印刷，校正，出版の実務を一手に引きうけて来られた編集局長の原氏が，ご老体の上に56年の後半に腰椎を痛めて入院療養されることになり，「光学」出版実務の流れが危機に瀕する事態になったことであった．学会誌発行業務をかねてから手伝っておられた原氏のご息女が，事務局と病院の間を往復して業務の遂行に努力してくださったが，他方掲載論文や解説の専門的立場からみた編集と校正のために西田氏を始め企画担当委員が定期的に事務局または病院に出かけ，ゲラ刷りの校閲のご苦労を重ねてくださり，私達一同は原氏の容態とともに事務局の将来を心配しつつ，毎号の編集，出版を続けた．綱渡りのようなやりくりながら諸氏のご協力のおかげで，私自身の任期を終え，後任の西田新委員長に引き継いでいただいたわけで，同委員長はその後もご苦労の多かったことと思う．そして，間もなく事務局も学会誌刊行センターが引きうけてくださったことを伺い，私も本当に安心している．

あの頃から5年経た今，当時大いに気炎を上げた方達が，それぞれの分野で第一人者として活躍されている姿を見，また最近改めて，そして5年前の「光学」のみでなく光エレクトロニクスの領域までを包含した日本に初めての本格的な光学会と専門誌の誕生の気運が高まっている情勢を知り，思いを新たにしてその発展を期待しつつこの稿を終える．

（1986年10月22日受理）

「光学」の編集をふりかえって

第6代編集委員長
西田　信夫（日電光エレ研）

編集委員会から「委員長時代の編集委員会の様子，苦労話，やり残したことなどを書くように」とのご指示をいただいたが，委員長を退任してホッとしたとたんに大抵のことは忘れてしまって，どうも編集委員会のご意向に沿えそうもない．それでぐずぐずしていたら，再三の督促をもらってしまった．仕方がないので，多少の思い出話をして任を果たしたことにさせていただきたいと思う．記憶違いもあるかと思うが，ご容赦願いたい．

私の編集委員長としての任期は昭和57年1月から昭和59年3月までの2年3カ月で，任期中に幹事の交代時期が変わったために，歴代委員長より3カ月長いが，「光学」の編集にかかわった期間となると，もっと長くて，9年3カ月であった．すなわち，4人の委員長の下で委員をやらせていただいた後に委員長になったわけ

で，これはいろいろなやり方を勉強させていただいた点において非常に幸運だったと思っている．

編集委員会に大きな変革をもたらしたのは今は亡き高崎委員長であったと思う．それまでの編集委員会では，大抵の場合，委員長が解説の依頼などについて案を出され，各委員は意見をいう程度で，午後2時に始まった委員会が4時半頃には終ったように思う．委員にとっては，とくに私のように若輩の委員にとっては，真に楽な委員会であった．それが高崎先生が委員長になられてからは，地方編集号の発行など新しい企画を持ち出され，委員の意見を求めるものだから，しだいに議論が活発になり，5時終了の委員会が6時を過ぎることも多くなった．それにつれて，「光学」の内容も従来に増して充実していったと私には思われた．

高崎委員長は「光学」発行の予算管理もしっかりされ，許される範囲内で増ページを行なわれた．その予算管理の役割を私がおおせつかったのだが，これが後に「光学」の発行を中央科学社（というより，原さん）から学会誌刊行センター（発送業務等は学会事務センター）に移すにあたって非常に役に立った．高崎委員長のもう一つの夢は，「光学」の発行の遅れをなくすことであったが，これについては残念ながら実現せず，当時の発行はだいたい1カ月遅れであった．

高崎委員長の任期満了に伴って私の任期も終わると思っていたが，田中委員長の下でも委員を努めさせていただくことになり，しかも非公式ながら副委員長をおおせつかった．

田中委員長のときに「光学」発行にとってゆゆしい事態が発生した．それは，原さんが昭和 56 年の1月か2月に腰骨をいためられたことである．このために「光学」の発行はさらに遅れることとなった．編集委員会では，原さんに代わる発行所について検討を重ねたが，原さんの「光学」発行に対する熱意の強さもあって，田中委員長時代にはついに実現しなかった．

田中委員長の任期満了に伴い，今度こそ私も退任と思っていたら，正に晴天の霹靂とでもいおうか，龍岡幹事長から「委員長をするように」とのお電話をいただき，まったく自信のないこととて，だいぶん悩んだ末お受けしたのであった．

委員長を拝命するまでがいささか長くなってしまったが，これらのことが私の委員長としての行動に大きく影響したので述べさせていただいた．すなわち，委員長としての私の希望は，（1）「光学」発行の遅れをなくすこと，（2）「光学」をより良くするために編集委員会をさらに活発化すること，（3）「光学」をより親しみやすいものにすること，（4）高崎先生が始められた地方編集号を他の地方にも広げること，（5）「最近の技術から」などの執筆要項を充実させること，などであった．これらの希望のうち，「光学」発行の遅れをなくすことが最も難題であったので，以下では主としてこの件について述べることにする．

原さんの体の具合は私が委員長になってからも思わしくなく，第 11 巻（昭和 57 年）1号は実に5月になってから出るという有様で，さらにミスも多くなり，編集委員が原さんの家まで行って最終チェックをするという状態になった．「光学」の発行所の変更は最早猶予できない状態であった．

「光学」の新発行所の第一候補として，田中委員長時代から学会誌刊行センターがあがっていたが，発行費が高くなるのではないかとの懸念があった．それと，発行所を原さんから他の所に代えるためには，やはり応用物理学会の了解を得ておく必要があるということで，応用物理学会に相談したところ，三美印刷（「応用物理」の印刷所）が編集業務も手がけたがっているとの話があり，早速三美印刷と交渉を持った．しかし，いよいよ最後の段階になって，印刷屋はやはり印刷に徹したいとの理由でことわられてしまった．そこで，ついに学会誌刊行センターしかないということになり，とにかく原さんに比べて発行費がどれだけ高くなるか検討してみることにした．この検討に当って，先に述べたように高崎委員長の下で担当した「光学」発行の予算管理の経験が大いに役立ったわけである．原さんと学会誌刊行センターの発行費用を比較すると，手数料はたしかに原さんのほうが安いが，印刷費は学会誌刊行センターのほうが一度に刷れるページ数が多いという理由で安い，など合計ではそれほどの差はないことが明らかになった．そこで，早速学会誌刊行センターにお願いすることにした．学会誌刊行センターのほうも快く引き受けてくれた．こうして代りの発行所が決ったが，残った難問は，それまで散々お世話になった原さんに発行委託の中止を申し入れることであった．

昭和 57 年8月 27 日，残暑のきびしい日であった．藤原幹事長と重くるしい気分で赤羽にある原さんのお宅にお伺いし，昭和 57 年限りの申し入れを行なった．原さんはすぐにでも辞めさせられるかと思っておられたようで，この年の6号まで発行できることをむしろ喜んでくれた．しかし，やはり淋しそうであった．

原さんのほうの結着がつき，いよいよ昭和 58 年から

は学会誌刊行センターで「光学」の発行をしてもらうことになり，担当も山口さんに決まった．学会誌刊行センターに対して第一に申し入れたことは発行期日の厳守であったが，そのためには編集委員会の姿勢も変える必要があった．どうしても載せたい解説でも期日に間に合わないものは次号にまわすことをしなければならない．これは担当の編集委員にとっては真につらいことであった．これら編集委員会側の意識変革の問題もあって，第12巻（昭和58年）1号は予定より1カ月ほど遅れたが，3月末頃には会員に届けることができた（ちなみに第11巻6号が会員に届いたのは3月初めであった）．2号は4月末，3号は6月中旬とほぼ1カ月おきに発行され，発行の遅れをほぼ取りもどすことができた．この間の学会誌刊行センターの協力は大変なもので，とくに山口さんは随分苦労されたことと思っている．4号からは確実に発行予定日に発行できるようになり，藤原幹事長も「発行が punctual になった」と喜んでくださった．

編集委員会の活発化については，「光学」発行上の問題点を次々にあげて議論を求めたところ，委員諸氏の熱心な討議を得て，5時の終了予定が早い日で6時半，遅い日には8時過ぎまで議論が及ぶことがあった．委員諸氏にとっては大変なことで，委員長の不手際を批判する声も聞かれたが，私のほうは時間延長は委員諸氏が議論を止めないからだとたいして気にとめなかった．今頃になって委員諸氏には申し訳ないことをしたと思っているが，お陰で「『光学』は良くなった」との声を方々で聞くことができた．委員諸氏の協力の賜物と感謝している．

「光学」が充実するにつれて，月刊化の希望が出始めた．とくに光学シンポジウム特集号として1号分を取られるのは困るという意見が多くなり，光学シンポジウム特集号をサプルメントとして発行することを幹事会に申し入れたが，年間7号の発行は予算上無理と拒否されてしまった．そこで，これも激論の末，光学シンポジウム発表研究を1ページだけのアブストラクトとして掲載することにしてしまった．

「光学」をより親しみやすいものにすることについては，まず第一に「さろん」の増ページをはかったが，まさか自分が書かされるはめになるとは思わなかった．

地方編集の拡大については，東北特集号を発行した．

執筆要項の充実については，委員にご苦労をおかけし，原稿を作っていただいたが，私の在任中に執筆者に送るためのきちんとした文書にできなかったことを反省している．

以上とりとめもないことを思い出すままに書かせていただいた．来年（16巻）からは，私の委員長時代には夢見るだけだった月刊化がいよいよ実現するわけで，真に喜ばしい限りである．光学シンポジウム特集号の復活，地方編集号の年間2号化なども可能なわけで，また枠にとらわれない思い切った企画をしていただいてもよいのではないかと思う．編集委員会の活発な議論により，月刊化された「光学」がますます充実することを祈念して筆を置く次第である．

(1986年10月9日受理)

「光学」の編集を振りかえって

第7代編集委員長
鈴木　健夫（NHK 技研）

「光学」を1巻1号からずっと並べてみると，10巻頃から各号の厚みが増しているのが一目にしてわかる．開いて頁をめくってすぐ気がつくことは解説記事の編数がその頃から増えていることである．1972年に「光学」が創刊されてから，初めの10年は定着期間でありその後発展期に入ったように思える．優れた解説記事を集めて読みやすい形式の情報を提供しようとした当時の編集委員会の努力がうかがわれる．オリジナル（研究，速報，寄書，技術報告など，ただしシンポジウム関係を除く）の編数とレビュー（総合報告，解説，最近の技術から，講義，調査報告など）の編数を各巻ごとにまとめてグラフに示すと図1のようになる．レビューの編数が増加しているのに対してオリジナルの編数が伸び悩んでいる様

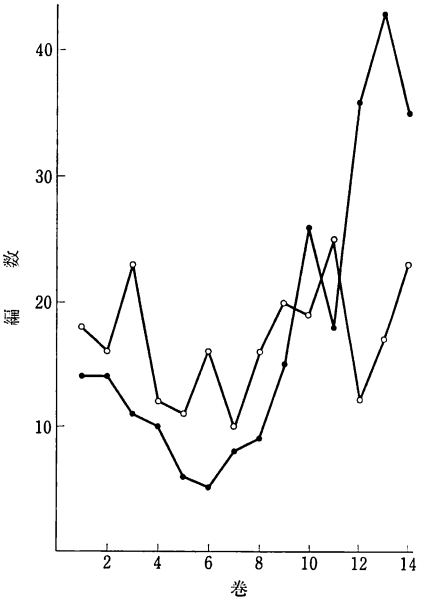

図1　オリジナル(○)とレビュー(●)の掲載編数の推移

子が示されている．光学関係の研究報告の数は国の内外を問わず近年かなり増加しているはずである．最近の傾向については新しい雑誌の創刊や旧雑誌の複数分化の例を思いだすだけでもこのことがうかがえるが，2号の展望記事の最後に載っている文献抄録委員長の作成した統計を見るとさらにはっきりわかる．このように光学関係論文が一般に増加しているのに対して「光学」におけるオリジナルが増えないのはなぜであろうか．量さえ増えればよいわけではなく，質の向上ももちろん必要であるが，そのためには活発に論文が投稿される状態にもっていくことがまず第一である．

良い論文を集めるにはそれなりの条件が必要である．受理から出版までの期間が短いこと，サーキュレーションが良いこと，雑誌の権威が高いこと，その他出版費が安いことなどいろいろ考えられる．編集委員会ではそれなりに対策をたててきた．以前は受理後最初に開かれる編集委員会で査読者を決定していた時期もあったが，現在は受理後ただちに編集委員長に連絡がきて，編集委員会を経ずに査読依頼にまわすシステムになっているので出版までに要する期間は査読期間と組版・印刷に要する期間の和である．来年からは月刊になるので，出版までの期間短縮が大幅に促進されるはずである．そうなると査読期間がかなりのウェイトを占めることになろう．査読者には突然に割込みの形で査読依頼が舞い込むのであるから迷惑なことは十分に承知しているが，これも研究者としての社会的責務の一つと考えていただき迅速な査読をお願いしたいと思う．

「光学」のサーキュレーションは年々向上してきている．一昔前の発行部数は1,000部そこそこであったが現在は1,900部に増えており，2,000部の大台に乗るのは時間の問題である．とはいってもこの数はほとんど国内向けであり，国際的にはまだまだ知名度は低い．創刊時には高度な学術論文に限らず現場的技術のレベルのものも取り上げるという旗印もあったように思う．これについては技術報告欄でそれなりの成果をあげてきたといえよう．それはそれとして，質の向上をめざしていく努力も必要である．質が向上すれば学術雑誌としての権威も向上しサーキュレーションの向上にもつながる．サーキュレーションを国際的に広げるには日本語ではどうしても限界を感じる．将来は欧文誌化の方向に行くべきだと思うが第一歩として，14巻から表紙に英文タイトルを併記しており，投稿規定も改訂して，日本語で書く制約を撤廃してあるので，意欲のある方はどしどし欧文で投稿する道が開かれている．

サーキュレーションと投稿論文の質量の関係は鶏と卵の関係に似ておりどちらを先にということもないが，要するに会員の支援によってのみ向上するものである．「光学」を名実ともに日本を代表する世界的光学雑誌に育て上げるよう全会員で考えていきたいと思う．

(1986年6月9日受理)

ホログラフィー応用に関する国際会議 (北京，1986) に参加して

松 本 俊 郎

大阪府立工業高等専門学校機械工学科 〒572 寝屋川市幸町 26-12

1. はじめに

ICHA '86 (International Conference on Holography Applications) が，Optical Society of China と Chinese Society of Theoretical and Applied Mechanics の主催で，7月2日より4日まで3日間，中国の北京で開催された．

会議が開かれたホテルの友誼賓館 (Friendship Hotel は，北京の北西部で北京国際空港より車で 40 分の所にある．ここはガーデンスタイルのホテルで約 40 万 m^2 の敷地内に会場である北京科学会堂 (Beijing Science Hall)，宿舎，食堂および庭園が点在しており周囲の喧噪とはうらはらな静かな環境のもとで会議に望むことができた．

会議は3会場を使ってパラレルセッションで行なわれた．筆者らの聴講は一部に限られ，すべてをカバーすることはできないが，以下参加者の一人として私見を加えて幾つかの話題を拾ってみたい．

2. ICHA '86

ICHA '86 の参加者は 296 人であった．内訳は中国より 204 名，外国より 18 か国 76 人および同伴者 16 人である．発表件数は，中国 60 件および外国 76 件で合計 136 件であった．主催国である中国の発表件数が最も多